

## はしがき

本書は、二〇二一年一〇月三一日に投票の行われた第四九回衆議院議員総選挙に関する全国の事例を分析したものである。令和初の衆院選であったこの選挙は、一二年衆院選に勝利することで政権奪還を果たし、憲政史上最長の在任期間を記録した安倍晋三政権が終了した後の、「ポスト安倍」を見据えた初めての全国的な国政選挙という歴史的な意味があった。

安倍晋三は、政権を奪還して以降、全国的な国政選挙において常に勝利を続けてきた。そのなかで二〇一三年参院選では「衆参ねじれ国会」状態を脱却し、その政策実行における制度的制約を取り払い、一四年衆院選では「一強多弱」といわれる状況を現出させるほどに自民党を中心とした安定的政権運営に必要な基盤を作り上げることに成功した。一六年参院選では、一八歳選挙権導入という憲政上の重要な契機を迎えた。これは日本政治の「第三の波」として位置づけることができる有権者の拡張、ある種の「民主化」をさらに推し進めることとなった（白鳥浩「一八歳選挙権だけじゃ変わらない」「隠れた格差」〔深読み〕『読売新聞オンライン』二〇一六年四月一九日配信、<https://www.yomiuri.co.jp/fukayomi/20160415-OT8T50051/>）。こうした安倍政権の勢いは、一七年衆院選において野党第一党であった民進党の分裂を誘発し、その野党の分裂状態は一九年参院選まで続いた。

二〇二〇年に安倍は体調不安から退任し、その後を継いだ菅義偉政権が九月一六日に成立した。菅は衆院選を行うタイミングを見計らっていたが、結局その時期を逃し、総裁選不出馬を二一年九月三日に表明した。九月二九日の総裁選の結果、岸田文雄が自民党総裁に就くこととなった。一〇月四日に菅内閣は総辞職し、岸田政権が誕生した。

第百代という記念すべき内閣総理大臣となった岸田は、就任直後の一〇月四日午後九時から記者会見を行い、一〇月一四日に衆議院を解散し、一九日公示、三十一日投開票で臨むことを発表した。就任直後の最短の選挙日程での選挙も異例なら、一〇月二二日に任期満了後の衆院選も前例のないものであった。つまり衆院選解散が一〇月一四日に行われ、選挙運動期間の開始となる公示が一九日に行われた上で、二二日に衆議院議員任期が満了し、投票票日が三十一日という予定である。これは解散から投票票まで一七日しかない短期決戦であり、これまで最短であった中曽根康弘内閣時の第三七回衆院選の「ロッキード解散総選挙」（一九八三年一月二八日解散、一二月三日公示、一八日投開票）の二〇日間を超えるスピード選挙となったのであった。

政権発足から一カ月もなく、解散から五日という短期間で選挙戦に突入するために、野党にとっては「与党による奇襲」を受けたという側面はあった。だが、一〇月二二日が衆議院議員任期満了だったことを考えれば、「与党のだまし討ち」とまでいう評価は当たらないのではないか。早晩衆院選は行われると考えられており、そうした意味では選挙準備が足りなかったとしてもそれは野党の自己責任の側面もないとは言えない。ただこれは与党にとっても言え、総裁が直前に交代したことに伴って新たに政調会長となった高市早苗は「五日」で政権公約を作った（二〇二二年一〇月二八日兵庫県西宮市の街頭演説）と述べるなど、与野党ともに準備不足はあった。それは各政党だけでなく国民にとってもそうだったであろう。つまり国民全体が、岸田首相のあまりに性急な衆院選の実施に、虚を衝かれた感があった。また、新型コロナウイルス感染症というパンデミックの中で行われた衆院選としても異例のものであった。

本書は、こうした異例の日程で行われた第四九回衆院選について、それぞれの選挙の現場である「地域」に焦点を当てて研究成果を編んだものである。しばしばメディアや研究の場においては、「おしなべて現在の日本政治はこうである」といった表現をすることがある。だが、それは往々にして、「地域」の実情から乖離した、どここのことを述べているのか理解できない日本政治像が結ばれることもある。そうした「地域」の現場から離れた言説は有権者の意識から乖離したものとなることで、有権者の政治離れを加速してしまうのではないか。多くの政治学者は、

より多くの民意が反映されるような、有権者の投票実感から離れない研究を世に問うことができないかとの意識を常に持っているだろう。そしてそれにより、日本政治の理解に貢献するだけではなく、投票率向上や、有権者の満足、政治の実感に寄り添う研究が出来ないかと考えているだろう。そこで本書では、「地域」としての選挙区に着目することにより、有権者の日本政治の理解や、有権者の感覚から乖離せずに寄り添うような日本政治像を結ぶことを試みている。

なお本書企画にあたって執筆者以上に尽力していただいたのは、法律文化社編集部の田引勝二氏である。また校正にあたっては、執筆者の一人でもある駿河台大学助教の黒木美來氏、フェリス女学院大学講師の佐賀香織氏、法政大学大学院の川代秀弘氏の諸氏に特にご協力いただいたほか、選挙期間中の調査（本書第1章と第3章）においては、執筆者である白鳥と黒木のほか、法政大学大学院の川代氏、井口恭平氏、渡部公章氏、実践女子短期大学講師の羽賀芳秋氏、そして法政大学の太田爽氏、渡邊智寛氏をはじめ、法政大学と同大学院の白鳥ゼミナール有志の、優秀な学生諸氏にもご参加いただいた。ここに特に記して感謝の意を表したい。

日本政治は多様性に満ちた「地域」からなる「モザイクのピース」の集合体である。執筆者の多くは、これまでミネルヴァ書房で刊行されてきた「シリーズ・現代日本の選挙」にも加わっており、各地域のエキスパートとして一定の評価のある研究者ばかりである。執筆者たちは、こうした研究を進めるなかで、継続的にそれぞれの地域の「モザイクのピース」の解明を行ってきた。ここに本書を新たなシリーズ「現代日本の総選挙」の第一巻として世に問うことで、後世の日本政治に関心のある読者に、多様性に富む日本政治の一断面を提示することを期待する。

二〇二二年六月吉日 参院選を控えた梅雨の市ヶ谷で

執筆者を代表して 白鳥 浩